

## (6) すいか

### ア 各病害虫の防除

うどんこ病

疫病

褐色腐敗病

菌核病

黒点根腐病

炭疽病

つる枯病

つる割病

ホモプシス根腐病

モザイク病(キュウリ緑斑モザイクウイルスによる)

アザミウマ類

アブラムシ類

ウリハムシ

コナジラミ類

ハダニ類

ネコブセンチュウ類

## ア 各病虫害の防除

### 【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病虫害)

### うどんこ病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 微生物殺菌剤を予防的に散布する。
- ※微生物殺菌剤の施用と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- 2 発病ごく初期から薬剤のいずれかを使用する。
  - 3 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。

### 疫病

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避け、なす科、うり科以外の作物と4年以上の輪作をする。
- 2 排水を良くする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 苗床及び本ばを土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ばの消毒の項](#)を参照)。
- 2 発病初期から、薬剤を散布する。

### 褐色腐敗病

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避け、なす科、うり科以外の作物と4年以上の輪作をする。
- ※なす褐色腐敗病、きゅうり、トマト灰色疫病、かぼちゃ、ピーマン疫病と同一の病原菌である。
- 2 排水を良くする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から、薬剤のいずれかを2～3回散布する。

### 菌核病

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設内の保温、換気を図り、湿度をできるだけ下げる。
  - 2 全面をポリマルチで被覆し、子のう盤の発生を防ぐ。
  - 3 菌核はこぼさないよう持ち去り、深く埋める。収穫後残さは処分する。地表面に残った菌核は10cm以上の深さに埋没する。
- ※施設の周辺にすいかなどの残さを置かない。  
※施設栽培に出やすい。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交配直前から3～4回、薬剤のいずれかを散布(又はくん煙)する。

### 黒点根腐病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場では連作しない。
- ※メロン黒点根腐病と同じ病原菌による病害である。

(薬剤防除)

- 1 土壌くん蒸剤で土壌消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ばの消毒の項](#)を参照)。

## 炭疽病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 雨期に発生が著しいので、薬剤のいずれかを7～10日おきに散布する。

## つる枯病

(耕種的・物理的防除)

- 1 床土消毒及び資材消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 株際は高くして株元に水をかけない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病ごく初期から薬剤のいずれかを茎葉に7～10日おきに散布する。
- 2 薬剤を、地際から10～20cmの範囲に塗布する。

## つる割病

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避け、5～6年以上うり科作物を栽培しない。
- 2 苗床の土は、山土、山林などからとった新しい土と取り替えるか床土消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 3 ゆうがお又はかぼちゃ台に接木する。
- 4 本ぼに消石灰を10a当たり100～150kg施し、土壌酸度を矯正する。
- 5 発病株は抜き取り、処分する。
- 6 田畑輪換のできる所は水田を畑にして作付けるのも一方法である。

## ホモプシス根腐病

(耕種的・物理的防除)

- 1 [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 登録のある薬剤で土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

## モザイク病(キュウリ緑斑モザイクウイルスによる)

(耕種的・物理的防除)

- 1 未消毒種子(台木、穂木とも)は、種子消毒する。
- 2 資材は新しいものを使用する。
- 3 病株は直ちに抜き取る。
- 4 連作を避け、うり科以外の作物と1年以上輪作をする。

## アザミウマ類

- ・[共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(物理的・耕種的防除)

- 1 施設内への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネットを展張する。育苗期の被覆も有効である。ほぼ完全に侵入を阻止するには、目合い0.4mm以下の防虫ネットが必要である。
- 2 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 3 粘着テープにより成虫を誘殺する。本種は特に青色に誘引される。

## アブラムシ類

(予防に関する措置)

- 1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 2 施設栽培においては、紫外線除去フィルム、粘着シート等の活用により、施設内への侵入を防止する。ただし、受粉を目的として蜜蜂を利用する場合には、紫外線除去フィルムは使用しない。
- 3 有翅(し)虫の飛来を防止するため、光反射資材によるマルチ若しくはシルバーテープ又は風上方向に防風垣若しく

は防風ネットを設置する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 2 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

(耕種的・物理的防除)

- 1 育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにつるし、有翅成虫が飛来していないか確認する。
- 2 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。
- 2 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。
  - 3 気門封鎖剤を散布する。
  - 4 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

## ウリハムシ

(耕種的・物理的防除)

- 1 防虫用被覆を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 成虫発生初期に薬剤を散布する。

## コナジラミ類

- ・[共通防除の章のコナジラミ類の防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 連作する場合には、作と作の間に施設内に植物が存在しない期間を設け、コナジラミ類がリレーされることを避ける。
- 2 育苗期の防除に努め、コナジラミ類が寄生していない苗を定植する。鉢物など、栽培に関係のない植物は、施設内に持ち込まない。
- 3 寄生範囲が広いので、ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 4 夏期には露地においても発生が多くなるため、秋期より栽培(定植)の始まる作型では、施設内への成虫の侵入防止対策を徹底する。0.4mm 目以下の防虫ネット防虫ネット、紫外線除去フィルム、光反射資材によるマルチ等を活用する。ただし、受粉を目的としてマルハナバチを利用する場合には、紫外線除去フィルムの使用がマルハナバチの活動に影響を与えることに留意する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 特にタバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しやすいので、予防策を基本とした総合防除を行う。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等を行う。
- 3 成虫密度の低下のため、粘着シート等を設置する。施設で発生予察のために黄色粘着テープを使用する場合は、侵入防止を徹底したうえで、施設の出入口や側窓付近に張り、定期的に交換する。
- 4 本圃において化学的防除を行う際は、早期発見、早期防除に重点を置き、薬剤効果に差があるので種の区別を的確に行う。
- 5 薬剤散布を行うに当たっては、葉裏に寄生している幼虫、蛹にも必ず薬剤がかかるよう丁寧に十分な量を散布する。さらに、薬剤が株全体によく到達するよう下葉の処分を早期に行うなど工夫する。
- 6 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 7 施設栽培においては、栽培終了後に作物上に寄生したコナジラミの施設外への逃亡・拡散を防止するため、収穫後の残さはキルパーの処理([共通防除の章のの資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照)や施設の密閉処理により、枯死、乾燥させた上で処分する。( [農薬登録情報](#) )

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 生物農薬は予防的に散布する。

※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の天敵等への化学農薬の影響の目安の項](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。

※コナジラミの生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。

2 気門封鎖剤を散布する。

3 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。

## ハダニ類

(予防に関する措置)

1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。

(判断、防除に関する措置)

1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。

2 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 生物農薬は予防的に散布する。

ハダニ類に対しては、以下のような天敵農薬の登録がある。

※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」の項](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。

※ハダニ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。

2 気門封鎖剤を散布する。

## ネコブセンチュウ類

・[共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

1 共台(台木品種：強剛、鬼台など)を使用する。

2 土壌還元消毒を行う(共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項を参照)。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

1 薬剤を定植前に土壌混和する。